2018年4月19日　　パ中研特別講演

タジキスタンの国と人々

宏輝システムズ株式会社　顧問（開発アドバイザー）　本村　和子

1. 中央アジア地域の特徴
* 地域の自然と社会
* 中央アジア諸国は19世紀半ばから末にかけて帝政ロシアに併合されたのち、70年間、ソ連邦を構成する社会主義共和国であった。
* 多様な民族と文化：中央アジア4カ国(カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタン)がトルコ語圏であるのに対し、タジキスタンはペルシャ語圏。
* ソ連時代、中央アジアに分類されていたのはキルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタンの4か国。
* カザフスタンはソ連邦時代、南の中央アジア4カ国とは別の経済圏であった。シベリアとの結びつきが強く、人口の半分近くがロシア人であったため、独立後はロシアに併合される懸念から首都をアルマトイからアスタナへ移した。
* 乾燥地帯なので、水資源の確保が重要。
* 氷河が水源だが、地球温暖化の影響で氷河が減っていることが懸念されている。
* 中央アジアの各共和国は社会主義政権下、モスクワの主導する中央計画化経済システムのもとで石油、天然ガス、綿花など一次産品を生産する原料供給基地となる一方、モスクワ中央政府は地域の経済発展の基盤となる道路、鉄道、航空路など運輸網、電力網などインフラを整備。また各共和国は教育、医療、年金など社会福祉費用を含む国家財源をモスクワから受け取っていた。各国の言語教育と同時に、共通語としてロシア語教育を行ったため、ロシア語が共通言語となった。
1. ソ連邦解体による中央アジア5か国の独立（1991年）
* 1991年の独立。
* 社会主義中央計画化経済から市場経済への移行。
* 外交や貿易など、国際関係をゼロから作り上げることが必要に。
* 国家再構築の過程で市民生活は壊滅的打撃を受ける。
* 中央アジア各国は国際緊急支援の対象に。
* 石油、天然ガス資源の豊かなカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンは比較的早く経済が上向きに。
* キルギスとタジキスタンは長い経済低迷に苦しむことに。
1. アジア開発銀行（ADB）に移り中央アジア地域の開発支援に従事（1996年-2005年）
* 1996年、アジア開発銀行に移り、中央アジア地域の専門家として開発支援事業に携わることに
* ＡＤＢに移って最初の数年はウズベキスタン、キルギス、カザフスタンで経験のあるＡＤＢスタッフのもと、事業実施の経験を積んだ。
* また、中央アジア全体を対象とした地域経済協力を促進するための枠組み作りに従事。
1. タジキスタンのADB加盟でタジキスタン担当に（1998年）
* 1998年、タジキスタンがADBメンバーになったのを契機に、タジキスタン担当を希望し、支援プログラム策定と実施の責任者となった。
* タジキスタンでは独立後、経済悪化と社会不安を背景に1992-1997年、内戦が5年間続き10万人の犠牲者が出た。
* その間、ＧＤＰは3分の一に落ち込み、旧ソ連諸国の中でも特に深刻な経済状態となり飢餓の危機に瀕するまでに。
* ソ連時代、歳出の半分はモスクワ中央政府からの補助が占めていたいが、それが途絶えたために社会サービスは壊滅状態になっていた

。

* 1997年、政府と反政府派との和平合意で、経済の後退はストップ。
* 政府は1998-2000年の3年間の和平期間中、国民的和解を目指し、社会の安定、難民の帰還、戦後復興を共通の目標として反政府派に政府の主要ポストの3分の一を割り当てるという、思い切った融和策をとった。
* この間、1998年にタジキスタンはＡＤＢのメンバーとなり、ＡＤＢの開発協力が始まった。
* 和平プロセスは予定通り2000年に終了。それ以降、国際支援や協力は加速。
* 2001年９．１１に続くアフガニスタン戦争で、当時のタリバン政権が崩壊、アフガニスタンからタジキスタンへの不法侵入が減り。タジキスタン社会の安定度は飛躍的に高まり、2002年以降は、2国間援助やＮＧＯ活動なども活発となった。
* ＡＤＢは2003年11月、ドゥシャンベに駐在事務所を開設。
* 私は国の担当官として本部で一年かけてタジキスタンでの事務所開設準備を行って理事会の承認を得たのち,自身が初代Ｃｏｕｎｔｒｙ　Ｄｉｒｅｃｔｏｒに任命され、赴任、2005年6月に退職するまでドゥシャンベで生活をした。
* ＡＤＢの事業は成果を収め、政府からの厚い信頼を得た。
1. タジキスタンの内戦後の復興と開発-ADBの開発支援事業の概要
* 内戦後の復興事業は困難を極めた
* タジキスタン大統領はじめ政府関係者も真剣に復興に取り組んだ。
* もともとソ連邦の中で最貧国であったところへの経済悪化で、汚職が蔓延していた。
* 支援事業実施にあたり、初等教育が行き届き、ロシア語が共通言語として残り、識字率はほぼ100%近くであったことはソ連時代の正の遺産。
* 地域社会の、強い血縁・地縁関係に基づく相互扶助や弱者救済の精神は、困難な変革期を乗り切るのに大いに役に立っていた。
* ソ連時代に整備された道路、鉄道、発電所、燃料や水のパイプライン、灌漑設備など、インフラは大きな遺産であったが、老朽化が進み、改修や近代化が必要な時期に来ていた。
* タジキスタンでは内戦の影響もあり、国中が荒廃し、国家財政は不足、あらゆる分野で国際支援を必要としていたので、ＡＤＢは国連、ＩＭＦ，世銀、欧州開発復興銀行などと協議しながら、タジキスタン政府との合意のもと、援助の分野を決め、支援計画を立てた。
* その結果、ＡＤＢは、道路、灌漑設備、発電、医療保健の分野を主な援助対象とすることとなった。資金に限りがあること、融資に対するタジキスタン政府の返済能力を考慮して、新規の建設ではなく改修事業と、関連した制度改革を目標とすることとした。
* また、ＡＤＢの支援計画だけでなく、タジキスタン政府が広く国際支援を受けられるよう、政府の開発戦略策定に協力、国際的な合意形成に協力した。
* 政府がＡＤＢに対して信頼を置いた理由は、タジキスタンがあまりにも荒廃していたため、他の国際機関が融資を行ってハード面の改善を実施することにしり込みしていたところを、相手国政府の意欲を認め、いち早く道路や発電所、病院、学校などの改修を始めたためであった。
* また各国際機関が共通して取り組んだのは、援助事業の効率を上げるために必要な、政府の統治能力：ガバナンスの向上であった。
* ＡＤＢは事業実施の過程で浮上した不正や汚職には、政府とともにとくに厳しく対応した。
1. 国民生活の改善に必要な民間経済の発展
* 国内の医療、教育の質の改善が難しいことは将来の発展を阻害する要因
* 燃料資源を持たず、食料自給率も低い
* 経済と社会情勢を改善するには民間経済が活発となる必要があるが、民間ビジネスの立上げは困難。
* 雇用創出が進まない中、優秀な人材流出が続いていることは深刻な問題
1. 2008年、宏輝株式会社のタジキスタンに自生する甘草資源の利用への関心にこたえ、合弁事業の立ち上げに協力
* 2005年、ＡＤＢを退職して以降も年2回、現地訪問を続けていたところ、知人を通じて、タジキスタンの甘草資源に関心を持つ宏輝を紹介された。
* 宏輝は独自の技術により甘草根からグリチルリチンを製造する小規模な企業であるが、60年近い歴史を持つ。
* グリチルリチンは食品、化粧品、医薬品用などに幅広く利用されており、宏輝は特に医薬品用では世界最大の出荷実績を持つメーカーである。
* 近年は用途の拡大に伴い、グリチルリチンの需要が高まりつつある。
* 甘草資源は日本国内には乏しく、これまで主な原料供給源であった中国で乱獲の影響により資源が枯渇したため、宏輝は中央アジア、ロシアへ進出し、現地生産を試みようとしていた。
* 独自の技術を持ち、地道な研究開発を続ける一方、チャレンジ精神も旺盛なところから、ご協力することとした。
* ただ、これまで、私は政府を相手にした公共部門での開発協力の経験しかなく、民間ビジネスの経験はなかったため、まずはドゥシャンベで宏輝経営陣を政府に紹介、その際、用意した簡単なビジネスプランを見た大統領は即刻、協力を約束、すぐ実施に移ることとなった。
* 政府からは3,000Ｈａの甘草資源生育地域の提供を保証された。
* 宏輝の立ち上げた現地工場は2011年、ＣＧＡを生産して、日本へ輸出開始。
* また2017年には甘草栽培を本格化、同時にＣＧＡ製造過程で出る回収上液と甘草根搾りかすを甘草栽培に肥料としてリサイクル、余った搾りかすは１００％燃料ブリケットに加工して現地の学校・病院で利用されるプロセスが完成した。
* その結果、同工場では甘草資源の採取・栽培からその加工によるＣＧＡの生産および排出物の完全処理に至る循環型プロセスができあがり、ＣＧＡ生産のモデル工場となった。
* これまでに現地では200名以上の雇用を創出している。
1. 更なる民間ビジネスの展開を模索
* 安全への懸念
* 乏しい資金
* 他の中央アジア諸国にもまして高いリスクにより、困難な外資導入